

---

# 遅い朝には

芹沢 忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遅い朝には

### 【Nコード】

N0842N

### 【作者名】

芹沢 忍

### 【あらすじ】

恋人同士の甘い休日。彼の為にランチの準備をしている様子を描いています。料理のレシピを出来るだけ解かりやすいように盛り込んであります。最後は少々切ない感じの終わり方。

## （前書き）

ズバリ「レシピ小説」。漫画で言うと「クッキング・パパ」「きのう何食べた？」のような作品です。恋愛というよりは、レシピを書くために物語を仕立てましたという作りになっています。

隣に彼が寝ている休日の少し遅い朝。一緒のベッドでのんびりと過ごしたい気もするけれど、普通に生活している限りお腹は空くものです。隣の彼も同じらしく、どうやら目覚めた様子。

「起きた？」

「ん」

寝呆け眼が可愛いと言っては男の人に対して失礼かな。目覚めのスイッチがまだ入りきっていない時の姿を見ると、自分に気を許してくれているんだなあと、小さな幸せを感じてしまう。ボサボサな頭と寝乱れたパジャマがその証って思う私も、余程、彼の事が好きなんだと自分でも呆れてしまったりして。

「何、笑ってるの」

そう言っただけ彼は大きな手で私の髪をくしゃりとかき混ぜた。肩を過ぎたロングの髪がわりと揺れる。

「ぼさぼさ」

笑った顔がこれまた可愛い。にやけてしまいそうなのを隠すように少し拗ねたようにクレーム。

「ぼさぼさにしたのは私じゃないよ」

そしたら引き寄せられてキスされた。

「もお、起きるの！」

嫌じゃないくせに逃げてしまう。明るいと何だか色々と恥ずかしいので。それが判ってるのか彼が笑う。意地悪だ。

「今、何時くらい？」

むくれてる私に何事も無いかのように尋ねる。私は黙って目覚ましを渡した。時間を確認すると、彼は慌てたように服を着替え始めた。

パン屋に行くのだ。今から出れば、ちょうど良い時間に、彼のお気に入りのパンが焼き上がる。ダイス型にカットされたチーズがゴ

口ゴロ入ったパン。

「じゃあ、パン買ってくるから。他に何かある？」

着替えが終わると、案の定、パン屋へ行く気満々だった。いつもの通り、私は家でパンに合うものを用意して彼の帰りを待つ。だから、これもいつものお決まりの台詞。

「甘いのが欲しいなあ」

「ケーキね」

ベイクド・チーズとクラシック・シヨコラと新作のケーキ。シンプルだけど一番お店のレベルが判るラインナップ。紅茶にもコーヒーにも合う。それに食べ飽きない。私が鼻屑にしているお店があるので、ケーキと言うと大抵はその商品を買ってきてくれるのだ。玄関に向かう彼を見送ってから、私も着替えて簡単に部屋を片付けた。それから冷蔵庫の中を覗きこむ。

卵にレタスにトマト。ベーコンは冷凍庫にあったよなあ。あと、玉ねぎとじゃが芋に人参か。あ、アボガドもある。他には確かピクルスのみじん切りの瓶詰をこの前買ったはず。使えるのってこんなもんか。他はツナ缶あったよ。さて、どうしよう。作業を進めながら、材料と料理の工程を組み立てて行く。

スープが飲みたいので、まずはそこから考えよう。ベーコンは一枚ごとラップに包んで冷凍してあるから、凍ったのを手でバキバキ砕いてみじん切りの玉ねぎと一緒に鍋で炒める。じゃが芋は五ミリ程度の銀杏切りにして鍋に追加。水を足して、コンソメキープを一つ投入。で、トマト。皮付きのまま卸し金ですると、皮を残して実がきれいにジュース状になるんで便利。こうしてすりおろしたトマトを鍋に入れる。沸騰したら中火でトロトロと彼が帰ってくるまで煮て、最後は塩と胡椒で味を調整。あ、レタスも少し足そう。ドライのパセリやバジルがあったら風味付けに少し入れても良いけど、今は切らしたよなあと、少し残念に思った。とろみも欲しいので、仕上げには水溶き片栗粉を少し入れよう。冷めにくくなるから良い考えだなあと自己満足。

次は人參かなあ。ピーラーで皮を剥いたら千切りに。塩で揉んでしんなりしたら水分を絞って味見。甘味と塩味が程良い感じならそのままで、しょっぱければ少し水洗い。ツナ缶を開けたら、開けた缶の蓋を利用して水分と油を軽く切る。で、人參と混ぜ合わせて一品出来あがり。レモンがあれば、少し絞りたいところだな。

アボガドは半分にしてから種を除いて身をスプーンで掻き出す。みじん切りのピクルスとマヨネーズと一緒に混ぜてペースト状にすると簡単にディップが出来上がる。

レタスは手で小さめにちぎってからざっくり水洗いしてザルに上げて水切りしておく。スープ用とサラダ用に。

卵はプレーンオムレツ。本当はバターが良いんだけど切らしてるからサラダオイルで。レタスと一緒に盛りつけて、卵自体ではなく脇にケチャップを添える。

よし、これで良いだろう。多分、オムレツを作る前くらいに彼が帰って来るんじゃないかな。

沸騰し始めたスープをかき混ぜてから味見。やや薄いけれどもコトコト煮込めば大丈夫。

他の料理も手早く処理していると、思ったよりも早く玄関のドアが開いた。

「ただいま」

「あ、お帰り。もうちょつとで出来るから座って待ってて」

そう言ったのに、後ろから抱き締められた。手元には包丁。まな板は不安定な位置にあつて、今そんな事をされるととても危ない。だから思いっきりキツイ口調で告げる。

「包丁持ってるんだから、そういうことしない！」

しょげかえった子犬のように、すぐごと居間へと引つ込む彼だけれども、これは彼が悪い。危ない事をした罪滅ぼしに、食卓の準備をもらっちゃおう。

台布巾を手にして居間に入ると彼に手渡す。

「拭いておいてね。で、拭き終わったら出来あがったものと食器を

取りに来て」

「座って待っててって言わなかったっけ」

やや不機嫌気味かな。

「さっきの罰」

笑って流してキッチンへ戻る。フライパンを火にかけてから、居間のローテーブルに出してもらう食器類を戸棚から出す。出し終わるとちょうど彼がキッチンに来てくれた。食器を手渡し、置いたら冷蔵庫の人参サラダとアボガドのディップを持って行って欲しいと伝えてから、オムレツの準備にかかる。

卵を割り、良くほぐす。火にかけていたフライパンから白く煙が上がる。卵がこびりつかない為には必要な作業。煙の上がるフライパンに少し多めに油を入れて、油が回るようにフライパンを動かす。それから卵液を投入し、菜箸で手早くかき混ぜる。全部が固まる前に手早くまとめ、フライパンの端を使ってあの独特のアーモンドに似た形に整えて完成。今日の出来栄えは自慢をしたいくらいに良い。満感で気分を良くして、これは自分で食卓へと運んだ。

後はスープをよそって持つて行くだけでOK。あ、よそう前にさつきスープ用に除けておいたレタスを入れないと。慌ててまな板と包丁を取り出し、五ミリくらいの幅に細切りして、向きを変えて三センチくらいにカットして鍋に入れた。そして強火に。沸騰したら水溶き片栗粉を入れ、もう一度沸騰させてから火を止めた。ゆるいところみが中々美味しそうだ。

居間のローテーブルは狭いので小さめのスープボウルを使う。トレイに乗せてスープを運び込み、テーブルに乗せると腰を落ち着けた。

「お待たせ。さ、食べようか」

庭に面した窓から日差しが入る。丁度、テーブルに光が掛って、いかにも休日のブランチャって雰囲気だ。向かいに彼の姿。目の前のテーブルには、自分の中ではちょっとカフェ風かなと思う料理たち。何だか嬉しい。

二人で「いただきます」と声を掛け合って食事始める。食べ始めるこの瞬間はいつも少し緊張する。やっぱり、作った立場だもの。相手の反応は気になっちゃうんだよね。

彼がパン切り包丁でパンを切り分ける。まだ温かいので少し切り辛そうだ。

私はスープに手を付けながら、その様子をドキドキしながら見ている。切り終わったら多分料理に手を付けるはず。視線に気付いて彼がパンを手渡してくれる。私がパンを欲しがってるように見えたのかな。確かに食べたいなあとは思ってたけど、気になるのは料理の感想の方。これ、重要！

手が伸びる。スープだ。どうなんだろう。

自分は一口パンをちぎって食べる。なるべく行動を気にしているのがバレないように、でも、視線を逸らし過ぎて怪しまれないように。

今度は、ディップだ。ちょっと味見してからパンに盛ってる。お、案外大量に乗せてる。これは気に入ったのかな？

私は再びスープを啜る。それから人參サラダ。あ、これはちよつと男の人にはあつさり過ぎたかも。でも、マヨネーズを使ったら味が被るしなあ。

私が手を付けたのをみて、彼も人參サラダに手をつける。パンに移して、あ、アボガド乗せたよお。やっぱあつさりし過ぎたか。

オムレツはどうか。バターじゃないから、あつさりし過ぎかなあ。

彼はレタスに卵をくるんでケチャップを乗せて口に入れた。それから再び同じように手を付けた。どうやら気に入ったみたい。

「スープ、もう一杯あるかな」

これは嬉しい。受け取ってキッチンへと移動してお代わり分を注いだ。

基本的に全力で食事をするタイプで、食べてる間は割と無口な彼。だから私はつつい観察するように食事の様子を見てしまう。大抵、



お腹が膨れてくるまでは黙々と食べるだけ。外食だと多少は喋るのに、家飯だとこんな感じだから、ちよつと不満だったりするんだけどね。今日の食べっぷりからすると、満足はしているみたい。

パンもおかずも粗方食べ尽くして「ごちそうさま」と手を合わす。テーブルを片付けて、今度はデザートを用意だ。

「紅茶とコーヒー、どっち？」

薬缶に水を入れながら聞くと紅茶と答えがあった。

風味が落ちないように冷凍庫に入れてある茶葉をガラス製のティー・ポットに入れる。お湯が沸く前にケーキ皿とフォークとマグカップを用意。冷蔵庫のケーキもテーブルへ持って行く。準備が終わる頃、薬缶がけたたましい音を立て始めた。

沸かしたてのお湯を高めの位置からティー・ポットへ注ぐ。空気を含みながらお湯が勢い良く茶葉を攪拌するのは楽しかったりする。何てことないんだけど、見ているとつい顔が緩む。たつぷりとお湯が入ったティー・ポットを居間へ持ち込むとテーブルに置いた。日差しを浴びるポットの中で、茶葉が元気に動き回り、琥珀の色が段々と濃くなる。茶葉は大きい方なので、長めに置いて香りと味を良く出す。苦くなったらミルクと砂糖で調整すればいいや。マグカップにお茶を注ぐタイミングは勘で決め、二つのカップに交互に三回くらいに分けて注ぐと、紅茶の良い香りが漂った。お皿には既にしっかりケーキ様が鎮座していた。もちろん彼が準備したんだけどね。

お茶の入ったカップを彼に手渡すと、自分の分のカップを両手で包み込んで一口啜った。少し濃いけれど、渋みは出ていないみたい。そのままだと濃すぎるけれど、甘いものには丁度いいかなと思う。ふと、彼に視線を移す。珍しいな。まだケーキに取り掛かっていない。私が不思議そうに見つめると、彼が視線を反らしてボソリと呟いた。

「今日の料理、美味しかった」

うわあ、こんなにはつきりと言ってくれたのって初めてじゃない

の？ 何があつたんだとか思ふけれど、言われた事実が素直に嬉しかった。彼は照れているらしい。こちらをまともに見ないで器用に頭を撫でてくれた。その仕草が優しい。

私は嬉しいのと、可笑しいので、顔が真っ赤になった。そうして、満足げにケーキを頬張った。

そんな事もあつたよねえと、あのチーズ入りのパンを見かけると想い出す。結局のところ、あの時の彼の行動は、実は浮気心を誤魔化すための罪な行為だったってのが落ちになっちゃったんでよなあと思ひ出す。浮気の後には妙に優しいってのは事実なんだというを実感したのはこの出来事のせい。夢中だっただけに痛過ぎると今でも思ふ。

パンに関しては本心を言うと、私はライ麦や雑穀の入ったパンの方が好き。彼はそういったパンが嫌いみたいだったから遠慮してたんだよね。こんな感じの小さな遠慮もあつたから上手く行かなかつたってのもあるんだよね。そんなことを考えながら、彼が通ったパン屋を横目に、自分好みのパンを置く店へと向かった。

思い出の味も良いけど、やっぱり好きなものの方が美味しいもんね。

今日は何にしようかなあと自分が心から食べたい物を考えながら、ワイワイと賑わい始めた商店街へと私は足を向けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0842n/>

---

遅い朝には

2010年10月8日10時47分発行